

ヒミツの週末 パティシエール①

おと
音はつき・作

ななミツ・絵



アルファポリスきずな文庫



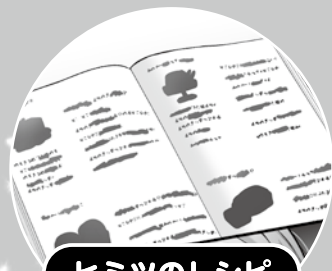
さいやま みみ
佐山 美海

いち か おば やさ
一花の叔母。優しく、
しんばいしょう
たまに心配性。



モコヒト

にんげん へんしん すた
モコが人間に変身した姿。
イケメン……！



ヒミツのレシピ

おばあちゃんが持っ
たヒミツのレシピ本。で
も、おばあちゃんの記憶
がないから今はまっくろ
に塗りつぶされている。



さいやま
佐山 みつき

いち か
一花のおばあちゃん。お
菓子作りがとっても得意
なんだけど……!?



**レシピを
完成させると、
記憶も
戻るモコ！**



とう じょう じん がつ
登場人物

ひ の いち か
日野 一花

かし だい す しょうがく ご
お菓子が大好きな小学五
年生！ ひよんなことか
ら週末限定で、パティス
リーをやることに!?

あずま れん と
東 蓮人

しょうがく ご ねん せい おんな
クールな小学五年生。女
の子が苦手みたいだけど、
妹には優しく……!?

モコ

ひつじ
羊のクッキーから生まれ
た、クッキーの妖精。魔法
が使えるちゃう！





スイーツ④

愛情たっぷりコンポート＊長崎

……

p163

スイーツ③

憧れのアフタヌーンティー＊滋賀

……

p128



スイーツ②

思い出の手作りバター＊千葉

……

p90

スイーツ①

農家カフェは大忙し＊北海道

……

p47



プロローグ

……

p6



プロローグ

真^まつ赤^かな母^{いちじ}に、ぽつてりとした生^なクリーム。
ふわふわのスポンジケーキは、口^{くち}に入^いれたら
しゅわりと溶^とけちゃう。

金色^{きんいろ}のフォークで一口^{ひとくち}食べると、ほわわん、
って優しい甘^{あま}みと母^{いちじ}の甘酸^{あまざ}っぱさがダンスするみたい。

幸せ^{しあわせ}の味^{あじ}、ってこういうことをいうんだと思う^{おも}。

「おばあちゃんのショートケーキ、やっぱり最高^{さいこう}！」



フォークを置いて両^{りょう}手で頬^ほを包^{つつ}み込むと、おばあちゃんは笑^{わら}った。

「一^{いち}花^かは、いつもそう言^いってくれるわねえ」

「だってだって、本^{ほん}当^{とう}にそう思^{おも}うの！ 何^{なん}度^ど食^たべても、毎^{まい}回^{かい}言^いわずにはいられない！」

わたしが力^{りき}説^{せつ}すると、おばあちゃんは嬉^{うれ}しそうに顔^{かお}をくしゃくしゃにする。

パティスリー・アンフルール。

誰^{だれ}もが認^{みと}める、この町^{まち}一^{いち}番^{ばん}のスィーツ屋^やさん。なにを隠^{かく}そう、そのパティシエールがわたしのおばあちゃんだ。

この町^{まち}の人^{ひと}たちは、みーんな、おばあちゃんのスィーツといっしょに育^{そだ}つてきている。
お誕生日^{たんじょうび}ケーキはどのおうちも、アンフルールのショ^{ショ}ートケ^ケキだったし、特^{とく}別^{べつ}な日^ひは
アンフルールのスィーツでお祝^{いわ}いしてきた。

おばあちゃんのスィーツはいつだって、たくさんの人^{ひと}たちを笑^{えが}顔^おにしている。

わたしにとっておばあちゃんは、憧^{あこが}れのパティシエール。

日^ひ野^{いち}一^{いち}花^か、小^{しょう}学^{がく}五^ご年^{ねん}生^{せい}。

幸^{しあ}せのスィーツを作るおばあちゃんに憧^{あこが}れる、見^み習^{なら}いパティシエールです！

「はあゝ、疲れたあゝ」

夜の十時半頃。

喉が渴いて目が覚めた。

明日から小学五年生。始業式の前だから、ちよつとドキドキしてるのかも。

なんといったって、クラス替えもあるし。

うちの学校は一学年に五クラスあるから、まだしやべつたことのない同級生もたくさんいる。

とにかくお水が飲みたくなって、ベッドを抜け出して階段を下りていくと、ちようど美海ちゃんかえり帰ってきたところだった。

「おかえり美海ちゃん」

「あれ、一花まだ起きてたの？ 明日学校でしょ？」

「うん、ちよつと喉が渴いちやつて」

美海ちゃんは、ママの妹。

つまり、わたしの叔母さん。

わたしはおばあちゃんの家で、おばあちゃん、美海ちゃんと三人で暮らしている。

だからといって、両親がいないとかそういうわけじゃないよ。

ママとパパは、お仕事の都合でアメリカで暮らしてるだけ。年に一度は帰国するから会えるし、二日に一度くらいは画面越しで顔を見ながら通話もしてるし。

だけど今のわたしにとって美海ちゃんは、保護者兼お姉ちゃんみたいな感じだ。

おおらかなおばあちゃんと違って、美海ちゃんは心配性。わたしのことも色々心配みたいで「あれやつたの？」とか「これやつておきなよ」とか、なにかと言ってくる。

ちよつと口うるさいと感じることもあるけど、それでもやっぱり大好きな家族。

「明日も早いんだから、すぐ寝なよ」

「はあーい」

美海ちゃんは都心にある大きな会社で働いていて、夜はいつも遅い時間に帰ってくる。

そういう人のことを、バリバリのキャリアウーマンっていうんだって。前にママが教えてくれた。

美海ちゃんは、そのままお風呂場に行こう。
台所へ向かうと、おばあちゃんがなにかを書いているところだった。

おばあちゃんも、まだ起きてたんだ！

「どうしたの、眠れない？」

わたしに気付くと、おばあちゃんはメガネを外して、ぐうつと伸びをする。ううん、と首を振りながら冷蔵庫を開け、冷やしてあったお水をコップに注ぐ。

トプトプトプ、とこぼさないように。

「なんか目が冴えちゃった」

花柄のコップといつしよに、おばあ



ちゃんの前の席につく。

本当は寝ないといけないのは分かっているけど、このままベッドに戻ったところですんなり眠れる気がしない。

「おばあちゃん、ちよっとおしやべりしようよ」

「えー？ 明日、眠くなっちゃうんじゃないの？」

そんなふうに言いながらも、おばあちゃんもなんだか嬉しそう。

おばあちゃんとわたしは、おしやべりするのが大好きなんだ。

手元で開いていたノートをボタンと閉じたおばあちゃんは、「ちよっとだけね」と首をすくめる。

おばあちゃんのこういうところ、大好き。

大人だけど（しかもおばあちゃん！）、こうやって目配せをして、いたずらっ子みたいな顔をしていると、友達みたいに感じちゃう。

こんなところを美海ちゃんに見られたら「もう！

早く寝なさい！」って言われそうだし、

けど、幸い、美海ちゃんのお風呂タイムは長い。

「美海が出てくるまでね」

おばあちゃんもお風呂場の方を振り返って、しーつとしながら笑う。

わたしたちはよく似ている、って、ママや美海ちゃんがよく言う。わたしにとってそれは、これ以上ないくらい誉め言葉。

だってわたしはパティシエールとしてはもちろん、ひとりの人として、おばあちゃんみたいになりたいって思っているから。

「そうだ、羊さんクッキー食べる？」

「えっ、今日いっしょに作ったクッキー？」

「そうそう。一花用に、数枚持ち帰ってきたの」

おばあちゃんは「よいしょ」と言って立ち上がると、棚の上に置いてあったお皿を持ってくる。

そこには今日、わたしがおばあちゃんと作った羊型のクッキーが四つ。

アンフルールのお店とわたしたちの家は同じ建物だけど、完全に仕切られている。

わたしはいつも、学校が休みのときや放課後は、お店でおばあちゃんの手伝いをしてい

るんだ。

今日だって、羊さんの形をしたバタークッキーをおばあちゃんといっしょに作った。

このクッキーはわたしの大好物。シンプルな味で、サクツとしておいしいの。

「一花も、羊さんクッキーはもう十分に上手に作れるようになったね」

「わあ、本当!?」

「うん、お客さんにも好評よ。これからもつと、

一花が作ったスイーツもお店に並べていこうね」

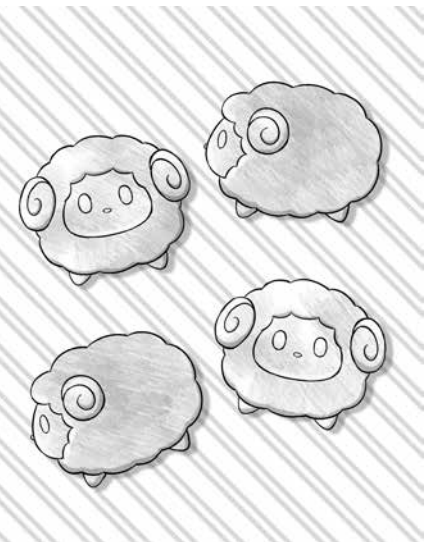
「やった〜っ!」

思わず立ち上がると、お風呂場の方から「一花、

まだ起きてるの!?」なんて美海ちゃんの声が聞こ

えてきて、わたしは慌てて口を押さえる。

それからおばあちゃんと顔を見合わせて、小さな声で笑った。



ドキドキの新学期。今日からついに、わたしも小学五年生だ。

桜はだいぶ散っちゃったけど、まだ少しだけ残っている。そんな中で、クラス分けが貼ってある掲示板を見上げた。

「あ、あつた！」

ずらりと並ぶ名前の中、自分の名前を見つけるのは結構大変。

今年は五年三組みたい。担任の先生は、優しいと人気の林先生だ。ついてるぞ！

「他に誰がいるかな」

同じクラスのメンバーを確認すると、仲のいい子たちの名前もちらほらあつて、小さくガッツポーズをする。

すると。

「えー、東くん三組だつて！」

「本当だ。同じクラスになり
たかったのにー」
すぐ隣にいた女の子が残念
そうな声を出すと、もうひと
りの女の子がはあくため息
をついた。
東蓮人くん。
かつこいいと人気だけど、
色々と難アリなんてことも言
われている。

なぜかというと――

「あつ、東くん！」

隣の女の子の声に、つられるように振り向いた。

ちょうど掲示板を見に来た東くんは、女の子の声なんか聞こえてないみたいに無反応。



自分のクラスを確認すると、「お、おはようっ！」とはにかみながら挨拶する女の子を完全無視して、すたすたと歩いていった。

そう。東くんはとてつもなく、感じが悪い」んだって。

「今日もクールでかつこいこい！」

「本当だよ、そこがいい！」

だけど不思議なことに、そういうのも含めて人気がみたい。わたしにはちよつと、分らないけど。

それに「かつこいこい」っていうのは、チョコレートケーキの「オペラ」みたいなものことだとも思ってる。

つやつやつとしたチョコレートが光るオペラは、本当にかつこいもん。まさにクールって言葉がぴったり。

ああ、やつぱりスイーツのことを考えているときが一番幸せだ！

「日野一花です。お菓子作りが大好きで、将来の夢は立派なパティシエールになることで

す！」

あたし 新しいクラスでの自己紹介。

元気がいっぱいにそう言うとき、友達が「一花の家はアンフルールなんだよ」と付け加えてくれる。

そうすると教室内で「ああ！」とか「いいなあ」とか、そういう声が聞こえてきて、くすぐったい気持ちになる。

わたしのことを知らなくても、アンフルールのことは知っている子がたくさんいる。その事実が嬉しくて、誇らしくて。

ゆつくりと教室内を見回したとき、じつとこちらを見ている東くんが目が合った。

わたしがにこつと笑いかけると、彼はあからさまに嫌そうな表情で窓の向こうに顔を向ける。

噂通り、ちよつと感じは悪いかも。だけど、人とコミュニケーションを取るのが好きじゃないだけかもしれないし。

そういうのって、人それぞれだもんね。

わたしはもう一度クラスのみんなをゆつくりと見回して「よろしくお願いします!」と元氣よく言ってから席についた。

そのタイミングで、コンコンと教室のドアがノックされる。

林先生が廊下に出てしばらくすると、顔だけこちらに出して「日野さん、ちょっと」とわたしのことを呼ぶ。

あれ、クラス替え初日だけど、もうなんかやつちやつた?

もしかして始業式の時、きよろきよろよそ見してたのばれたかな。

うーん、そんなことくらいで呼び出される?

不思議に思いながらも廊下に出ていくと、そこには驚くことに、スーツ姿の美海ちゃん
がいた。

額に汗をかいているし、ハアハアと息も荒い。走ってきたのかもしれない。

いや、そんなことよりも!

「どうしたの? 仕事は——」

そう言ったときに気が付いた。美海ちゃんの顔色が、走ってきたはずなのに、真っ白

だつていうことに。

嫌な予感が心臓のあたりを襲ってくる。

会社に行っているはずの美海ちゃんが、走って学校に迎えに来たということは——

「おばあちゃんが転んで、救急車で運ばれたの」

「ええっ……!」

美海ちゃんは病院からの電話を受け
て、そこへ向かう途中に寄ってくれた
みたい。

いやだ、もしおばあちゃんに万一の
ことがあったら……

「ランドセル持ってくる……!」

泣きそうになるのをぐっとこらえる
わたしに、美海ちゃんは黙って頷いた。



おばあちゃんは、わたしにとって本当に大事な存在。

おばあちゃんでありながら母親のようでもあり、師匠であり、なんでも話せる友達みたいな相手でもある。

そんなおばあちゃんに、もしものがあつたら――

「おばあちゃんっ！」

急いで病室のドアを開けると、そこにはベッドの上でお茶を飲むおばあちゃんの姿。

あれ？

なんだか、元氣そう……？

「あらら、一花まで来てくれたの？ そんな大事じゃなかったのに」

病院着のおばあちゃんは、わたしと美海ちゃんを見ると目を丸くする。それから申し訳なさそうな顔で「ごめんねえ、ちよつと転んだだけなのよ」と言った。

よ、よかつたー！

おばあちゃん、無事だったんだ！

へなへなと力が抜けて思わずその場に座り込みそうになったところを、慌てた美海ちゃ

んが支えてくれる。

「もうお母さんたら……。本当、びっくりしたんだから！」
涙ぐみながらも美海ちゃんがおどけてくれて、一気に空気が軽くなる。

アンフルールにはちよつとした半地下のスペースがあつて、食品庫になつている。おばあちゃんはその階段を踏み外して、転んじやつたみたい。

「どうにか自力でお店までは戻れたんだけど。そのあと立ち上がれなくなつちやつてね」

ちようどそこへ、常連のお客さんがやつてきた。

頭を打つたということもあつて、



心配して救急車を呼んでくれたんだって。

アンフルールもおばあちゃんも、本当に町の人たちに愛されている。

「それで、すぐに退院できそうなの？」

美海ちゃんの質問に、おばあちゃんは小さなため息をついた。

「それがねえ、どうも骨折しているみたいで。入院とリハビリが必要でずっと大事じゃない、つてさつきおばあちゃんは言っただけ。」

そんなことない！ 骨折なんて！ 入院とリハビリが必要なんて！

「それから……」

おばあちゃんは申し訳なきように、わたしのことを見る。

「お菓子作りに関することが、はつきりと思い出せなくなっちゃってね……」

「えっ!？」

「でもね、一時的なものでしょうつてお医者さんは言ってたから。きつとすぐに思い出すわよ」

あとでお医者さんから詳しく話があるそうだけど、そんな深刻なものじゃないみたいで

ほつと息を吐き出した。

「年をとると、色々ためね」

ふふ、と力なくおばあちゃんが笑う。

そのとき、わたしは思い出していた。

それは少し前の夜のこと。

勉強の合間にリビングに行ったら、ちようどおばあちゃんとママが国際通話をしているところだった。

いつも元気なおばあちゃんが、珍しくため息をついていたのを聞いたやつなんだ。

あのときもおばあちゃんは、今と同じ表情をしていた。

『年をとると、色々ためね。わたしのお菓子も、もう時代遅れなのかしら』——つて言いながら。

そのときに感じた不安が、ベッドの上のおばあちゃんの様子でよみがえる。

おばあちゃんがかもうお菓子を作らなくなっちゃいそうな予感に襲われて、わたしは慌ててベッドに駆け寄る。

それからおばあちゃんの手を握った。

「そんなことないよ！ わたしもいるし、美海ちゃんもついてるよ！ だから大丈夫だよ、絶対に！」

わたしがおばあちゃんを元気づけなきゃ。

これまでずっと、おばあちゃんがそうしてきてくれたように。

病院を出た美海ちゃんとわたしは、ふたり並んで帰り道についていた。
今日は始業式だけだから、学校はもう終わっている。美海ちゃんも、このあと在宅ワークに切り替えるって言っていた。



「おばあちゃん、怪我だけで済んでよかったね」

わたしがそう言っていると、美海ちゃんは「本当だよ」と大きな息を吐き出した。きつと美海ちゃんも、電話をもらったときはヒヤリとしたはず。

わたしが頷くと、美海ちゃんはちよつと暗い顔で言った。

「だけど、お店はちよつと難しいかもね」

「え……？」

「退院までしばらくかかるだろうし。パティシエール不在じゃ、アンフルールもお休みするしかないでしょ。わたし、お菓子はまったく言っていないほど作れないし」

ため息といつしよに、「仕方ないよ」とあきらめの言葉を吐き出す美海ちゃん。たしかに美海ちゃんは、お菓子作りも料理も大の苦手。

だからといって、アンフルールを完全にお休みにしてしまったら、楽しみにしているお客さんをがっかりさせちゃう。

それなら――

「お店のお菓子作りは、わたしがやる！」

決意をこめて、胸を張る。

美海ちゃんは目をぱちくりさせてから、「いやいや、ちよつと待って」と右手をおでこにあてて、反対の手に前を出した。

「大丈夫、ちゃんとできるよ!」

放課後や休みの日はいつもお店の手伝いをしてい
るし、おばあちゃんといつしよにスイーツだつた
くさん作つてきた。たしかにまだ小学生かもしれない
けれど、おばあちゃんから認められているレシビだつてある。

それに、わたしは知っているんだ。お店の棚の奥に、おばあちゃんの大事にしてきたレシビ本があることを。

「まず、一花は学校があるでしょ。わたしだつて仕事に行かないといけないし」

「それなら、週末だけオープンさせるのはどう? 今も美海ちゃん、仕事がお休みの日は
お店にいてくれるでしょ」

「それはそうだけど……」

「それに……、銀行の人だつて来てるんだよね?」

なかなか折れてくれない美海ちゃんを、わたしはまっすぐに見る。

お店を続けていくには、お金がかかる。

この場所アンフルールを建てたおばあちゃんは、そのお金を銀行から借りていて、
ちよつとずつ返していると前に教えてくれた。

おばあちゃんは、『お店を続けるといふのは、楽しいことばかりじゃないのよ』と、小
さい頃から現実的なことも話してくれてたんだ。

「一花、知つてたの?」

美海ちゃんはちよつと目を丸くしてから、はあ、とため息をつく。

「お店を手伝つていれば、そういうのだつて気が付くよ」

「それもそうか。一花ももう、五年生だもんね」

美海ちゃんはどうもひとつ息を吐き出すと、腕を組んだ。

「売り上げが伸びなければ、お店をやめることも考えて、つて。銀行の人からは言われて



るの」

「ええ！」

思っていたよりも、状況は深刻だったらしい。

だけど、だったらなおさら、おばあちゃんがいけない間にお店を閉めるわけにはいかない。

絶対に、おばあちゃんのパティスリーを守りたい！

わたしは足を止めると、背筋を伸ばして深呼吸をする。それに気付いて振り向いた美海

ちゃんに、勢いよく頭を下げた。

「美海ちゃん、一生のお願い！ わたしにチャンスをください！」

スカートを握る両手に、きゅつと力が入る。

一生のお願いなんて、今まで何回も使ってきた。

だけど今日のお願いは、本当に本当の、“一生のお願い”。

それに美海ちゃんだって、おばあちゃんの大切なアンフルールを守りたい気持ちがあるはず。

「はあー……」

おおげさなぐらいの美海ちゃんのため息に、おそろおそろ顔を上げる。

美海ちゃんは両手を腰にあてながら、やれやれって顔を振った。

「どうせダメって言っても、一花は聞かないでしょ」

顔をしかめながら、だけど諦めたように肩の力を抜いた美海ちゃんに、わたしは思い切り抱き着いた。

「わっ……！ ちょっと……！」

「美海ちゃんありがとう！ 大好き！ 神様！」

よろめく美海ちゃんに、もつとぎゅうつと強く抱き着くと、お花みたいな香水の匂いがした。

その香りは、わたしの背中まですつぽりと包んでくれて。

むぎゅーつと抱きしめ返してくれた美海



ちゃんは、「はあー」とそのままの姿勢でもう一度ため息をつく。

「本当わたし、一花に甘いんだよなあ」

口うるさくつて、厳しい。だけど美海ちゃんは結局のところ、わたしの気持ちを尊重してくれる。

「へへつ、美海ちゃんだーいすき」

「ずるいなあ、一花は」

自然と腕を組んで、おうち目指してゆつたりと進んでいく。

平日のお昼過ぎに、美海ちゃんと街中を歩く。こんなこと、なかなかないから新鮮な気持ちだ。

おばあちゃんのことはびつくりしたけど、リハビリをすればよくなるって言ってたし。

お店のことも、どうにかわたしに任せてもらえそうだし。

いろんな心配事がクリアになった途端、お腹がぎゅるゝと大きな音をたてた。わたし、すぐにお腹が鳴っちゃうんだよなあ。

「そういえば、お昼ご飯も食べてなかったね」

美海ちゃんが笑いながらそう言つて、わたしは何度もぶんぶんと頷く。

「なにかおいしいもの食べてこうよ!」

駅前の商店街は、平日の昼間でも賑わっている。

うちのお店は、この商店街を抜けた先の路地を曲がったところにある。

本当はこの商店街のどこかにお店を出したかったけど、その頃、ちよいどいい物件がなかったんだつて。

それでもたくさんのお客さんから愛されるパティスリーになったのは、おばあちゃんの努力があつたからこそだ。

「パスタもいいし、とんかつもいいなあ」

わたしがそう言つと。

「寿司もいいし、そばもいいかも」

美海ちゃんがそう言う。

こうやって、なにを食べようかときよろししながら歩くのも、商店街の楽しみ方のひとつ。だってここには、本当においしいお店がたくさんあるんだもん。

そうやって一軒一軒のお店を見ていると、ぴかぴかのおしゃれな建物があることに気が付いた。

とっても素敵で、外国のお店みたい。
カフェとかかな。もしそうだったら、アンフルールのお菓子を出してくれたりしないかな。

わくわくした気持ちで、ドアに貼ってあったお知らせを読む。

世界でも有名なパティシエ、フルイチカズヤのパティスリーがオープンします！

みなさんのお越しを、心よりお待ちしております。

パティスリー・ミラージュ

美海ちゃんと思わず顔を見合わせる。フルイチカズヤさんといえば、スイーツ界では知らない人がいないほどの有名な人。いろんなブランドとのコラボ商品なんかも作っている。そんなフルイチカズヤさんのパティスリーが、この商店街に!?

とてつもない強力ライバルの出現。

——わたしたち、どうなっちゃうの!?



まさかこんな近くに、あの有名な
ティシエのお店がオープンしちゃうな
んで。

学校でも近所でも、ミラージュの
ことは大きな話題になっている。

さらに、ピンチにはピンチが重なる
みたい。

「ええつ、なにこれ！」

お店のキッチンの、棚の奥。

引っぱり出してきたのは、おばあちゃんが大事にしていたレシピ本。

たまに懐かしそうにそのページを開いていたおばあちゃん。わたしが読んだことはな

かったけれど、そこにおばあちゃんのレシピのすべてが記されている。

——はずなのに。

「全然読めない……!!」

「秘密のレシピ」と書かれた、外国の小説のような立派な表紙。

見ているだけでわくわくしそうなレシピ本を開いて、わたしは愕然とした。

まるで黒いペンでいたずらされたみたいに、レシピの一部が黒く塗りつぶされていたか
ら。

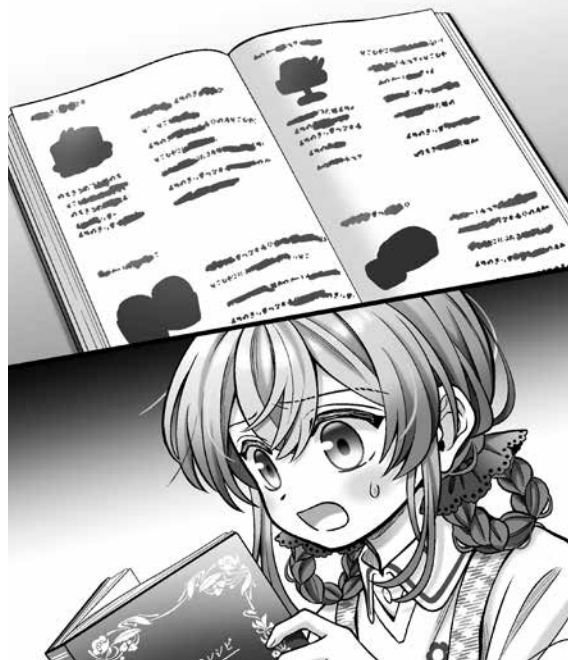
おばあちゃんが描いたのであろうスイーツのイラストも、シルエットが分かるだけの黒
塗りになってしまっている。

「これじゃあ、なんのスイーツか分かんない……!!」

レシピ本を逆さにしてみたり、横から眺めてみたり。

それでもやつぱり、どう頑張っても解説不能！ このレシピ本に、一体なにが起こった
んだろう？

うーん、と腕を組んでいると、ピピピピピ、とアラームが鳴り響いた。



「あ、クッキーが焼けたみたい」

レシピを見なくても、上手に作ることができるスイーツ。おばあちゃんから合格点をもらっているのは、シンブルなバタークッキーだ。

お店に並べるために、レシピ本を開く前に仕込んだものが焼きあがったみたい。香ばしいかおりに、きゅん、と胸の奥が高鳴る。

おばあちゃんが初めて教えてくれた、生地を羊の型で抜いた「羊さんのクッキー」。オーブンを開けて、ミトンをはめた両手で天板を取り出す。

「うん、いい感じ！」

ほんのりと焼き色がついたクッキーたちは、見ているだけでも愛おしく感じちゃう。

さくつとした歯触りとバターの香りが最高の、羊さんのクッキー。

冷やした牛乳と食べるのがわたしのおすすめ。美海ちゃんはブラックのコーヒーと食べるのがお気に入りなんだって。

つまり子供から大人まで、みんなが楽しめるクッキーだということ！

すうーとクッキーの香りを楽しんだあと、そつとシンクの上に置く。

——と。

そのうちのひとつがみるみるうちに大きく丸く膨らんでいき、ぽんつと音を立てて弾けた。

「きやつ……！」

キラキラと、金平糖みたいな七色の光が宙を舞う。

その真ん中から、手のひらサイズのもここの羊さんが現れた。

宙に浮いた羊さんは、ぱたぱたと、両手でキラキラの光を体からはたき落とす。

それからちゃんと咳払いをすると、目をぱちぱちとさせるわたしの方へと向き直る。そうして「えっへん」と胸をそらせた。

「僕が来たからには、もう大丈夫モコ！」

「へっ!?」

「だーかーらー！ 僕が来たんだから、全部うまくいくモコ！」

「しや、しやべつてる!？」

頭の中はパニック状態。

だつてまさか、クツキーから羊さんが現れるなんて思わないもん。

しかも手のひらサイズだし、しゃべるし、浮いてるし！

羊さんはわたしの反応が不満なのか、唇をつんと尖らせる。

「まさか、僕のこと知らないモコ？」

「う、うん……」

素直に頷くと、今度はやれやれというように首を横に振った。

それからくると空中で一回転すると、じゃーんと両手を広げてポーズを決めた。

「僕はモコ！ クツキーの妖精モコ！」

「妖精って、あの妖精!？」

素つ頓狂な声を上げるわたしを見て、モコはふふんと笑ってる。

たしかに昔からおばあちゃんは、スイーツには妖精さんが宿るのよと話していた。

だけどそれは、おとぎ話のようなものだと思っていたのに。

モコはびつくりしたわたしを見て、むんと胸を張る。

「一花は、秘密のレシピが読めなくて困ってる。そうだモコ？」

「わ、わたしのこと知ってるの!？」

「みつきの孫でしょ？ もちろん知ってるモコ！」

みつき、というのはおばあちゃんの名前だ。

モコとおばあちゃんは、知り合いということ？

わたしの疑問に気付いたのかもしれない。

モコはすいーつと飛んでくると、レシピ本をゆつくりと開いた。

「地図も、真っ白になっちゃってるモコね……」

わたしもレシピ本を見る。さつきは気付かなかったけれど、表紙を開いた先には日本地図が描かれていた。白黒のシンプルな地図だ。

「もともとは、色がついていたの？」





わたしが質問すると、モコは頷く。

「僕は昔、みつきと二人で全国を回って四十七種類のレシピを集めたんだモコ。レシピが見つかった場所は、この地図に色がつく仕組みになってるモコよ」

そのままモコは、ページをめくる。

わたしがさつき見たのと同じ、虫食いされたように、文字やイラストが黒く塗りつぶされたようなレシピたちが現れる。

モコはそれを見ると、悲しそうにがつくりとうなだれる。

「これじゃ、なんのレシピも分かんないモコ……」

「モコとおばあちゃんが集めたレシピなんだよね？」

「そうだけど、僕もどんなレシピがあったかは思い出せないんだモコ」

モコによると、これはただのレシピ本じゃなくて、魔法がかかった特別なレシピ本なんだって。

過去に、若い頃のおばあちゃんとモコで完成させたレシピ本。

だけど今回、おばあちゃんが頭を打ってお菓子に関する記憶を失ってしまったせいで、

レシピ本が不完全な状態になってしまっているらしい。モコのレシピに関する記憶があやふやになっちゃったのも、その影響みたい。

「みつきは、大丈夫なんだモコ……？」

心配そうな顔をするモコに、わたしは安心させるように「大丈夫だよ」と頷いた。

そこで、ぴこんとアイデアが浮かぶ。

「ねえモコ、おばあちゃんに会いに行こうよ！」

おばあちゃんとモコは、ふたりでこのレシピ本を完成させた。

ふたりにはたくさんさんの思い出があるはずで、お互いにきつと特別な存在で。

そんなモコに会えば、おばあちゃんもお菓子作りの記憶に戻るかもしれない。

我ながら名案！

そう思ったのに、モコはまた寂しそうに唇を尖

らせた。

「そんなの、ムダだモコ。みつきは僕のことまで忘れてる。いきなり行っても、びつくりさせるだけだモコ……」

「それなら、思い出してもらるようにしようよ！」

わたしが明るくそう言くと、モコはびつくりしたように顔を上げる。

おばあちゃんは、忘れちゃってるんじゃない。

ただちよつと、思い出せなくなっているだけなんだ。

だって大事なこつて、大好きな人のこつて、心の中にきちんと刻まれているはずだもん。

「ねえモコ。わたしといつしよに、秘密のレシピをもう一度完成させない？」

「ほ、本気モコ？」

「うんっ！ そしたらきつと、おばあちゃんもモコのことを思い出すよ！」

「そう思うモコ？」

「そうだよ！ それにわたしも、おばあちゃんにお菓子作りのことも思い出してほしいも

ん！」

若い頃のおばあちゃんが挑戦したことに、わたしもチャレンジしてみたい。

おばあちゃんみたいなパティシエールになるために、精一杯頑張りたい。

秘密のレシピを完成させれば今よりもつと、たくさんのお客さんに来てもらって、喜んでもらえるようになるはず！

「分かったモコ！」

元氣を取り戻したモコは、再び胸をそらせると、今度はガレージに出るようにわたしを促した。

お店の裏にあるガレージは、車が二台停められるようになっていた。ただど今は、美海ちゃんの自動車が一台中だけだ。

ガレージにやってきたモコは、またまた自慢げに胸を膨らませるとわたしの足元を指した。

そこに、小さい子が遊ぶようなミニカーがポン！ と出てくる。

おしゃれなミント色で、屋根の部分がこげ茶色でかわいい。窓からはひしが出ていて、

ちゃんとしたカウンターもついている。

ミニサイズというだけで、本物そっくりな細かい作りだ。

「これ、キッチンカー？」

「正解！」

ほんっ！

モコが叫ぶと、再び金平糖みたいなキラキラが目の前に舞い上がる。

みるみるうちにミニカーが大きくなつていき、あつという間に本物のキッチンカーに大変身した。

「わあ！ モコすごい！」

魔法を見たのなんて初めて！

しかも、こんなにかわいいキッチンカーを出せちゃうなんて！
わたしがぴよんぴよんと跳ねながらキッチンカーの周りをまわるのを、モコは満足そうに見ている。

「中も本物だモコ。冷蔵庫もガスコンロもついているし、オーブンだって備え付け。本格派！」



自信満々の様子のモコの前で、実際に車内に
入って「きやー！」と歓喜の悲鳴が出ちゃう。

だって本当にすごいんだもん。中は広々として
るし、ピカピカの最新設備。しかもおしやれなん
だから！ 魔法の力で実際のスペースよりもずつ
と広くなつているとモコが説明してくれた。

よおし、このキッチンカーで色々な場所へ行つて、
秘密のレシピを完成させよう！



「モコ、これからよろしくね！」

「どんなことでも任せるモコ！ 羊に金棒！」

「ふふつ、それを言うなら鬼に金棒だけどね」

どーんと胸を叩くモコに、わたしはとびきりの笑顔を向ける。

わくわくしてきた！

絶対に秘密のレシビを完成させて、おばあちゃんの記憶とお店を守るんだ！

キッチンカーパティスリー、プティ・アンフルール、オープンです！

スイーツ①農家カフェは大忙し*北海道

町の商店街は、いつも活気で溢れてる。

だけど今日は、ちよつとだけ様子が違う。町の人たちにプラスして、きつと遠くから来たんだらうなっていう人たちが大勢いるから。

「あそこモコ？」

わたしの肩に乗ったモコが、ふん、と息を吐き出す。

「そう、今日がオープン日みたい」

わたしたちの目線の先には、長い長い行列。その列は、新しいスイーツ屋さん、パティスリー・ミラージュ目当てのお客さんが作ったものだ。

「わあ、大盛況……！」

想像の十倍、ううん、百倍くらいのお客さんがミラージュのオープンを楽しみにしてい

たみたい。

ちなみに今日のアンフルールは、閑古鳥が鳴いている。その原因は多分、並んでいるスイーツが一種類だけだから。

これについては、悔しいけど仕方ない。だって、おばあちゃんはお菓子作りの記憶を失ってしまつて、頼りにしていたレシピ本まで不完全になつてしまつている。

お店に並べられたのは、羊さんのクッキーだけ。

でも落ち込んでいるひまはないよね！ 秘密のレシピ本を完成させれば、お客さんたちもまた戻つてきてくれるはず！

「どんなスイーツが売られてるモコ？」

「ちよつと見てみようか」

行列に並んだら、いつお店の中に入れるか分からない。

お店の前行つて、列がのびているのと反対側の窓から、中を見ている。

茶色いツヤツヤの扉には、金色のかわいい取っ手。窓の向こうに広がる店内は、オレンジ色のおしゃれなライトで照らされている。ショーケースでは、手のひらサイズの上品そ

うなスイーツがキラキラと輝いていた。

「偵察するなら、もつと自然な感じでやれよ」

突然後ろから声をかけられ、わたしの肩はびくつと大きく跳ね上がる。慌てて振り返ると、そこにはしかめっ面をした東くんが立っていた。

「なんだあ、東くんかあ」

ほつと胸をなでおろすと、東くんはさらに不機嫌そうな顔になる。

「なんだ、つてなんだよ」

「だつてほらお店の人だつたら怪しまれちゃうかなーつて」

「覗きは立派な犯罪だよな」

「そんなんじゃないよ、素敵なお店だしどんなスイーツがあるのかなつて中を見てただけで……」

そんな話の途中ではつと気付く。わたしの肩に乗っているモコのことだ。

どうしよう。えつと、ぬいぐるみつてごまかせるかな？



「えっと、あの、これはね、えっと！」

わたわたとモコを隠そうとするわたしを、東くんは怪訝な顔で見ている。

だけどモコは、いつの間にか洋服のポケットの中に隠れていたみたい。ほっとしたものつかの間、東くんはなにかを疑うようにわたしをじろつと睨んでいる。

こ、怖い……！

一瞬、顔が強張りそうになっただけど、深呼吸をしてみつこりと笑いかけた。

おばあちゃんがよく言ってる。相手は自分の鏡みたいなものだから、にこつとしてほしければ、まずは自分から笑うんだよって。

それに笑顔には不思議なパワーがあつて、笑っていると前向きな気分になれちゃうんだ。「東くんもスイーツが好きなの？」

すると彼は、また不機嫌そうな顔をしながら「別に」とふいつと横を向いた。相変わらずつれない態度。だけど耳が、ちよつとだけ赤くなっているような。もしかして、照れ屋さんなだけだったりして。

「わたしはスイーツ、大好き！」

「それはそうだろ。アンフルールのひとり娘なんだから」

「わあ、知っててくれたの？」

「今日の自己紹介で知っただけ」

「あ、そういえば自分で言っただけ」

わたしがそう言うのと、東くんがちよつとだけ笑った気がした。すぐにむすつとした顔に戻っていたから、見間違いかもしれないけど。

こんなやりとりをしている間にも、ミラージュにはお客さんが順番に入っては出ていく。お目当てのスイーツが買えたお客さんたちは、かわいらしいオレンジ色のケーキボックスを持って嬉しそう。

アンフルールのケーキボックスは、白のシンプルなもの。やつぱりおしやれなお店は、こういうところにもこだわっているんだ。

だけど大事な中は中身だよね!? スイーツのおいしさなら、アンフルールだって絶対に負けてないはず！

わたしが鼻息をフンフンと荒くしていると、東くんがもう一度わたしの方を見ていた。